

# The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』  
第8号 (2007年1月)

ハーバード大学  
ケネディ・スクール  
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

## 今月号の目次

1. 謹賀新年
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. アジア、多様性と統一性との狭間で  
多様性に満ちたアジア  
「多様なアジア」における統一性とは?  
知識社会におけるアジアの中の日本
4. 編集後記

### 1. 謹賀新年

新年明けましておめでとうございます。今年も、若人の皆様と共に、「グローバル時代における知的武者修行」に関連した「基礎知識」と「心構え」について考えてみたいと思います。年末、出張先のイスラエルから成田空港に戻り、私は4年ぶりに日本でお正月を過ごしました。「栗原後悔日誌@Harvard」の新年号はこうして日本から発信致します。新年を迎えて、私は日本で美味しい日本酒を頂戴していますが、ボストンでは、ワイン、紹興酒、また地ビールなど様々な種類のお酒を頂いております。我々の仲間にはお酒が大好きな人が多く、彼等とグラス片手に行う知的対話はケンブリッジ生活の楽しみの一つです。

新年号は最初に、3ヵ月前の10月5日、2つの会合を「はしご」した話をご紹介します。4時半から我が研究センター(M-RCBG)で、或る専門誌の創刊を祝う会合がありました。本校の環境問題専門家であるロバート・ステヴィンス教授等、ワインを愛する経済学者が*Journal of Wine Economics (JWE)*を考案し、またノーベル経済学賞受賞者のダニエル・マクファデン教授も寄稿された創刊号が翌週の

『エコノミスト』誌(10月14日号)でも触れられることを祝って、創刊号を片手に12本の赤ワインのテイスティングを、ジョン・ラギー所長等と楽しみました。その時、私は「テイスティング」というより、はしたなくも「鯨飲」になってしまい、修養を積む必要性を改めて痛感し、猛省しておりました。ところが、その反省から時を置かずして、「お調子者」の私は、6時過ぎから、親愛なる中国人フェローが重陽の節句を機にもてなしてくれた会合に出席して、翌朝には後悔してもしきれない程の追加的「鯨飲」を致しました。

### 2. 栗原後悔日誌@Harvard

ワイン愛好家ならば、1976年5月24日にパリで行われた歴史的な米仏間のブラインド・テイスティングをご存知の方も多と思います。ネット時代が到来したお蔭で、当時の『タイム』誌や『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事は簡単にウェブ上で読めます。それらを読むと、ワインについては決して譲る態度を採らない誇り高きフランス人を、カリフォルニア・ワインで負かした時の米国人の気分が推測できるような気がします。このように、米国東海岸に住む私は外部者ながら、大西洋を挟むワインに関する熱い競争と論争に臆面も無く参加し、同時に環太平洋地域のワインについても、米国産に加えて豪州産、チリ産を味わい、グローバリゼーションの恩恵に与っている次第です。さて西太平洋に位置する日本が、アジア・太平洋諸国との関係を真剣に考えることが地政学上必須となることは誰も否定しないと思います。しかしながら、アジア・太平洋地域と申しまして、大変広

い地域です。こうして広大なアジア、そして太平洋地域を我々はどうか捉え、どう付き合っ  
てゆくべきなのか。これが今年最初の「栗原  
後悔日誌@Harvard」です。いつもの通り、結  
論を先取りして述べます。すなわち、アジア  
及び太平洋の諸国を概観すれば、文化及び価  
値観や経済的な発展段階に関し、諸国間で多  
様性を呈していることは誰も否定しまい。諸  
国間での多様性自体は優れた点も数多くあり、  
問題ではない。が、地域全体の統一性、均質  
性という視点から考えれば、これまた多くの  
課題を抱えていることも事実である。我々は  
この地域の異質性と類似性とを、直接的・継  
続的・多層的で双方向の知的対話を行いつつ  
正確に捉える必要があり、先入観や情緒的な  
態度で臨むことは大変危険である。こうした  
正確なアジア・太平洋地域の知識を基として、  
我々日本は世界的覇権国かつ極超大国である  
米国と共にこの地域の平和と繁栄を如何なる  
形で推進するかを考え、またアジア・太平洋  
諸国とどう付き合っていくのかを真剣に考え  
る必要がある。そして日本が抱く世界観とそ  
の達成方法について、双方向の知的会話が可  
能な日本人が、クリティカル・マスに達した  
一群を形成し、「知的サムライ集団」となって、  
アジアを含む世界に発信していく必要がある。  
以上が新年号の話であります。

### 3. アジア、多様性と統一性との狭間で

#### 多様性に満ちたアジア

私はケンブリッジを中心に多くの人々と  
話をしている時、アジアという地域の持つ広  
大さ、そしてその多様性、更には地理的定義  
としてのアジアの曖昧さを毎日のように感じ  
ております。一般にアジアと言え、私は、  
まず①日中韓等が在る東アジア、次に②シン  
ガポール、タイ、ヴェトナム、フィリピン等  
の東南アジア、③インドを含む南アジアが思  
い浮かびます。しかしこれらの地域だけがア  
ジアではありません。④友人の中西英樹氏が

シニア海外ボランティアの一員として活躍す  
るウズベキスタンをはじめとする中央アジア、  
⑤欧州の友人と話している時に感じるのです  
が、アジアの中で彼等が一番関心を持っている  
地域は我々が中東という西アジア、⑥サハ  
リンの天然ガス開発等で最近注目されている  
北アジアが挙げられます。更には、太平洋に  
絡んだ国々を、政治経済的な視点からアジア  
と共に考えることも頻繁に行われます。すな  
わち、⑦豪州やオセアニア諸国等の大洋州諸  
国、⑧太平洋の東側に在る米国、カナダ、そ  
してペルーやチリ等の中南米諸国もアジアに  
絡んで考えることがしばしば行われます。

こう考えますと、アジアは広く、政治経済  
的に、また宗教や歴史・習慣といった社会的  
に、各国間、時には個々の国の中でも多様性  
に満ちて、地理的な定義と共にアジアは捉え  
難い地域と言えましょう。小誌昨年9月号で  
触れましたが、数年前まで私は韓国に関して  
まったくの無知であったこと、そして、それ  
まで自分を国際人として愚かにも自惚れてい  
たことを恥かしく思ったことを述べました。  
ところで、中国に加え、韓国、ヴェトナムそ  
してタイといったアジア系料理の魅力に抗し  
難く、ケンブリッジでの私の昼食は完全に「ア  
ジア化」しているといっても過言ではありません。  
こうしたご縁からヴェトナムやタイの  
言葉や歴史にも関心を抱き始めましたが、そ  
れでもカンボジアやミャンマーに関しては何  
の知識も有りません。中央アジアに在るウズ  
ベキスタンに関しては、幸い前述の中西氏が  
発表されているブログを通じて、①当地の政  
治経済社会制度、また②敗戦後、多くの日本  
の若者がスターリン等ソ連の指示によって当  
地でご苦労された悲しい歴史をうかがい知る  
ことができました。とは言え、直接経験した  
訳ではないので、私の知識は完全に的外れで  
ある危険性を拭いきることはできません。私  
自身、米国や英独仏等の欧州諸国、更には中  
国に関して、現地に行き体験した上での知識  
と、書物やテレビ映像による知識とはまっ  
たく異なる事態に頻繁に遭遇しております。

この点について、「特定の地域情報収集の際、二次元の地図、三次元の地球儀、そして自分の足で歩いた地方では、土地勘と本質的な情報の理解力がまったく異なる」と私はしばしば友人と語り合っています。この意味で、若く、そして才能のある方々には、可能な限り正確な情報・知識を体得するため、世界の人々を相手に直接的・持続的・多層的で双方向の知的対話をして頂くことを願っております。

アジアの多様性について皆様は次のような感想をお持ちになるかも知れません。「アジアに限らず、欧州も米州大陸も、そしてアフリカも多様性を持っているのではないかと」。勿論その通りです。しかし、小誌3月号で詳述する予定ですが、欧米に比べ、アジアでは、構成する主要国間での知的対話が極めて希薄であります。歴史的に観て、アジアでは、「志」が高く才能有る人々が、相互に影響を与え、友好的に競い合う「場・方法」が極めて限られてきたことは誰も否定できません。これについて日本を代表する文化人、山崎正和氏が、『フォーリン・アフェアーズ』誌の1996年7/8月号で発表し、そして『中央公論』誌の同年9月号に邦訳掲載された論文「環太平洋文明の誕生(“Asia, a Civilization in the Making”)」が参考になります。同氏は同論文の中で、欧米が経験した「文明のダイナミズム」は、アジアでは過去になかったことを指摘されています。近年になって初めて、アジアの急速な経済発展により、また米欧が牽引するグローバル化に取り込まれる形でアジア全体の文明が勃興しつつあると山崎氏は述べておられます。遠い昔に遡りますと中国文明をはじめ、インダス文明、世界最古の文明であるメソポタミア文明、更には西アジアが絡むエジプト文明、すなわち世界の4大文明がアジアと深く関わっている訳ですが、中世・近世・近代を通じて欧米の文明が体験したような直接的に行う双方向の知的対話は相対的に希薄であったことは否めません。

ご承知の通り、私は小誌を通じて、「直接

的・継続的・多層的で、双方向の情報交換」の大切さを強調しております。その理由は、こうした形の情報交換を行わなければ情報の収集過程及び知識の形成過程で効率性を大きく損ない、また好機を逸する危険性が存在すると考えるからであります。如何に才能が有っても、また如何に「志」が高くても、ひとりの「ヒト」が独力で行えることは限られています。他の「ヒト」の指導や協力が無ければ、「知的迷路」に陥り、また何年も前に既に研究・発見されている事柄について如何に真剣に研究しても「知的な無駄骨」に終る危険性は誰の目にも明らかでしょう。ご存知の方も多いと思いますが、18世紀中国の偉大な学者である戴震(タイ・シン)の代表作の一つに『孟子字義疏証(モウシジギソショウ)』という哲学書があります。私自身、本学図書館が148冊所蔵する戴震の本を未だ1冊も読んでないので正確なことは言えませんが、東洋哲学に詳しい知人によると、1724年生まれの戴震が残した『孟子字義疏証』は、1627年生まれの日本の儒学者伊藤仁斎が著した『語孟字義』とほぼ同じ主張だそうです。「もし日中間で双方向の知的対話の道が有ったならば」と思っているのは私独りではないと思います。

シルク・ロードを代表とする東西間の交易は大昔から行われていたものの、山崎氏は「中国文明の尋常ならぬ排他的性格(Chinese civilization's unusual exclusivity)」に注目されておられます。確かにイタリア人宣教師マテオ・リッチが中国の数学者と東西間初の数学的情報交換を行ったとされるのが1589年、そして紀元前4世紀末のユークリッド幾何学(*Στοιχεῖα*/Euclid's Elements)を、リッチの友人で明の大学者、徐光啓が『幾何原本/几何原本』として訳出したのが1607年ですから、気が遠くなるくらいの時差が東西間に横たわっている訳です。また周知の通り、関孝和等の業績が示すように日本の数学(和算)も非常に高い水準にありました。そして1690(元禄3)年発表の井関知辰(いぜき・ともしき)の『算法發揮』は世界初の行列式に関する著作で、数学



が得意な方ならご存知の「ファンデルモンドの行列式(Vandermonde Matrix)」と深い関係を持つ画期的な本です。私は18世紀フランスの天才的音楽家・科学者、ヴァンドルモンドゥが行列を考える約80年前に発表された『算法發揮』を、日本から直接的に、或いは中国を通じて間接的に知っていたら、数学の世界史は変わっていたのではと創造力を逞しくすると同時に、「直接的・継続的・多層的で、双方向の情報交換」の重要性を痛感しています。

以前小誌で触れた通り、私がアジア諸国を初めて訪れたのは1979年の中国ですが、次に機会が訪れたのは1997年の香港、韓国及びシンガポールでした。嘗ては、今ほどグローバル化が進展しておらず、また私の外国語能力は、(a)英語、(b)仏語、(c)独語の順であったため、10年近くにわたり欧米諸国「だけ」の出張にとどまっていた。それが、1997年、香港返還直前、マサチューセッツ工科大学(MIT)のスザンヌ・バーガー教授が香港政庁の依頼で作成されたご著書(*Made by Hong Kong*)を現地で報告される機会に招待を頂き、また小誌9月号で紹介した技術規格に関するソウルでの国際会議に出席し、更にはデニス・エンカーネーション本校教授が議長として出席されたシンガポールでの或る国際会議に参加者の一人として招かれて出張したのが久々のアジア訪問になりました。こうして「米欧担当」の私が、グローバル化の進展と、米国ケンブリッジ主導のアジア域内における情報交換システムが発達したお蔭でアジア諸国の方々と知り合うことができるようになりました。そして現在、直接的・継続的・多層的でまた双方向という点で、以前と比べて格段と質の高い情報交換がアジア域内で可能となりました。従って、以前は西洋の東洋専門家が日本文化の珠玉の一つ、『源氏物語』が何故、近隣諸国である中国や韓国で評価されないのかと不思議がっていた事態は改善されつつあり、両国で日本文化を評価する人々が次第に増えていることは喜ばしい限りです。とは言え、アジア域内の双方向的

な知的対話は未だ始まったばかりとの感を拭いきれませんし、私自身恥ずかしながらアジアに対する歴史認識の不足を認めざるを得ません。またアジアの方々と話し合います時、同地域に関する私の知識不足を痛感します。この意味で皆様がアジアに関して多くを学んで下さることを期待致します。ケンブリッジに移って以来、そしてアジア出身の研究者と話す機会が増えて親しくなるに従い、太平洋戦争の話についても彼等と時折話すようになりました。その時私は、故山本七平氏が優れた著作—例えば、『日本はなぜ敗れるのか—敗因21カ条』や『下級将校の見た帝国陸軍』—の中で指摘された点、すなわち帝国日本は敵国である米国や占領地のフィリピンに関してほとんど知識戦略を持たないまま空しく戦争を続けたことを思い浮かべ、私のアジアに対する過去の無関心・無知を猛省しています。

情報通信技術(ICT)の発達で大量の情報を世界中に瞬時かつ安価に伝達することが可能となり、従って双方向の情報交換を行うことが技術的・経済的に容易になりました。そして交通手段の発達で、グローバル化が急速に進展し、多様性を示すアジアは、全体として大きな期待と同時に重大な課題を抱えています。すなわち、期待されることとして、アジアのもつ多様性は、「ヒト」、「モノ」、「カネ」及び「情報」に関して、「直接的・継続的・多層的で、双方向の交換」を通じて、アジア諸国を豊かにさせることでしょう。もう7年以上前の話ですが、私が東京工業大学の非常勤講師をしていたご縁から、1999年10月、東京国際フォーラムにおいて開催された或る国際学術団体(IEEE)の最終全体会合(Plenary Session “Industrial Policy in the Age of Networking”)における司会役を私は仰せつかりました。その時、講演者であるカリフォルニア大学バークレー校のステイヴン・コーエン教授は、国際的なネットワークの構築が容易となった現在、「多様性」こそが、価値形成において重要であることを強調されました。確かに、国際的にネットワークが形成される

なか、「皆と同じことをする」という「同質性」への志向は、国際的分業体制の進化に逆行し、過当競争の犠牲に陥るだけです。

### 「多様なアジア」における統一性とは?

とは言え、「多様性」だけを強調しているだけでは、国際社会が「統一性」を欠く形となり、最悪の場合にはホブズの有名な言葉、すなわち、「万人の万人に対する戦闘状態 (bellum omnium contra omnes./The war of all against all.)」を招く危険性に陥ります。前述の会合で司会者であった私は、直後に始まる常陸宮殿下ご臨席のレセプションにおける諸規則を会合の最後に伝えてくれるよう事務局から依頼されていました。私は、「皆さん、コーエン教授は多様性が重要であることを私達に教えて下さいました。しかし、事務局は皆様がレセプション参加に関して、ルールを厳粛に守って下さるようお願いしています。この点について、柔軟な対応は一切許されないので」と、ジョークを混じえて事務的諸規則を伝えたのを今でも思い出します。確かにいくら多様性が重要であったとしても、特定の「ヴィジョン」や「ルール」が無ければ、物事は効率良く、また一定の方向に進進いたしません。このように、政治経済分野だけでなく、宗教的や歴史的な多様性を提示していること自体はアジアにとって強みとなりましょうが、同時にアジアは如何なる分野、如何なる理由で、また如何なる方法で、「統一性」を見出しかつ実現するのか、これらを考えることがアジアの課題であります。換言すれば、「目的(ヴィジョン)」と「手段(ルール)」を勘案しつつ、「多様性」と「同質性」との狭間で、また「統一性」と「非画一性」との狭間で、私達アジアの人々は、国、組織、そして個人の立場から或るバランスを見出すことを迫られていると言えましょう。そして、日本及び日本人は、国家、企業や組織、そして個人として、こうした多様な姿のアジアの中で「何」を「如何」に主張していくのか、これを良く知り、また深く考える必要があると私は考え

ます。これに関連して、「日本はアジアに対して先導的役割を果たす」という言葉を口にする方々がいらっしゃいます。しかしながら、その方々のうち何人が、その「目的」と「手段」を理解し、またアジアと日本、両者に横たわる「多様性」と「同質性」、また「統一性」と「非画一性」を判別出来ているのかと私は疑問に思っています。また、「これは日本人にしか分らない事物(或いは考えや感情だ)」と仰る方々がいらっしゃいます。これについても、その方々のうち何人が①日本と日本以外との世界との違いを知った上で、本当にそう思っているのか、それとも②日本以外の世界を知らない「ので」、勝手に日本に独特なものだと考え、或いは③日本以外の世界を知らない「のに」、勝手に世界に通用する普遍的なものだと考えているのかが分らなくなります。

②のケース、すなわち、日本以外を知らないが故に、日本を特殊なものだと勘違いしている人の発言に遭遇した私の経験をご紹介します。約15年前、日米間で様々な摩擦や誤解があった時代の話ですが、ケンブリッジでの或る研究会に、或る日本人研究者がいらっしゃいました。そして日米間の違いとして、国家・個人の関係に関し、日本語の「国家」という文字が如何なる意味を持つかを英語でご説明なさいました(随分昔なので完全に正確な形ではありませんが、“The Japanese ideograms for state—*Kokka*, literally means state and family—express the idea of the unity of the state, the emperor, and the family.”といった表現でした)。確かに「日米間」の違いとして、この表現は正しいと言えましょう。しかし、慧眼な読者の方はもうお気づきだと思いますが、この違いは厳密には近代以降の「欧米と東洋との間」の違いです。すなわち、維新以降の日本語「国家」は中国語の「国家(グオジャ)」に由来しており、隣国の韓国では、「クッカ(國家/국가)ですから、表記も発音もほぼ同じな訳です。この方のお話を聞いて、目を白黒している欧米出身の東洋史専門家、更には啞然とした顔をしている中韓両国出身

の研究者の方々のお姿を忘れることができませぬ。日本から来たこのお方は哲学者のヘーゲルが『歴史哲学講義(*Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*)』の中で中国に関して述べた有名な言葉をご存知ないのだと、私は溜息をつきながら下を向いていた次第です。そのヘーゲルの言葉とは、「(中国の)国家は家族的人間関係を唯一の支えとし、家族における信頼関係が客観的な形を採ったものが国家です。中国人は自分が家族の一員であることを忘れることなく、同時に国家の息子であることも自覚しています(Dieses Verhältnis nun näher und der Vorstellung gemäßer ausgedrückt ist die Familie. Auf dieser sittlichen Verbindung allein beruht der chinesische Staat, und die objektive Familienprietät ist es, welche ihn bezeichnet. Die Chinesen wissen sich als zu ihrer Familie gehörig und zugleich als Söhne des Staates.)」や「国家体制の基礎が考えられるとすれば、家族関係の基礎がそのまま国家体制の基礎でもあります(Diese Familiengrundlage ist auch die Grundlage der Verfassung, wenn man von einer solchen sprechen will.)」というものです。更に厳密に言えば、欧米でも日本同様に家族関係になぞらえた形で国家と個人の関係が在ったことも事実です。例えば、ラトガース大学のゴードン・ショシュエツ教授は、30年程前の1975年に、研究書(*Patriarchalism in Political Thought: The Authoritarian Family and Political Speculation and Attitudes Especially in Seventeenth-Century England*)を発表し、17世紀の英国は、日本(今は民主化が進展した日本よりも、むしろ北朝鮮)同様に、家父長制度的政治思想が支配的で、単に「汝の父母を尊敬せよ」として家臣や国民の忠誠心や服従を強いた史実を報告しています。こう考えますと、一見、日本に固有であるというように考える事物も、あまねく世界を見渡した上で考えてみなければ、大きな勘違いに陥る危険性が常にあると心得るべきでしょう。同様に、幕末・維新時の言葉「尊皇攘夷」も、中国の歴史に詳しい方は、すぐに日本に固有のものではないことはお分かりだと思えます。

次に③のケース、すなわち、日本以外を知らないにもかかわらず、日本だけで通用する常識を世界の常識として勘違いしているケースも往々にして見られます。これに関しては、前述の山本七平氏による名著『「空気」の研究』に示唆的な話が紹介されています。すなわち、「聖書学者の塚本虎二先生は、『日本人の親切』という、非常に面白い随想を書いておられる。氏が若いころ下宿しておられた家の老人は、大変に親切な人で、寒中に、あまりに寒かろうと思って、ヒヨコにお湯をのませた、そしてヒヨコを全部殺してしまった。そして塚本先生は、『君、笑ってはいけない、日本人の親切とはこういうものだ』と記されている。…(これは)全く善意に基づく親切なのである。よく、『善意が通らない』『善意が通らない社会は悪い』といった発言が…あるが、こういう善意が通ったら、それこそ命がいくつあっても足りない」と。私自身も、心から愛すべき善良な日本の方々が、「良かれ」と思ってした行為に対し、外国の方々が日本側の意図を理解できずに困惑気味に微笑み、或いは驚きつつ冷たい対応をしている場面—山本七平流に表現すれば、日本人の無邪気な「ヒヨコを死に至らしめる形の(ありがた迷惑な)親切心」—に少なからず遭遇しています。確かに、日本側と外国側、双方共に悪意は無いのですが、互いに価値観・習慣が異なり、その差を理解していないために、あたかも「宇宙人との対話」の状況に陥ってしまいます。

### 知識社会におけるアジアの中の日本

このように考えますと、アジアを中心として私達日本がアジアの平和と繁栄に関して、「指導的立場」を採るにしても、①如何なる「ヴィジョン」をもち、②如何なる「ルール」で推進してゆくのか、またそれらを、③(相手に理解可能な形で)如何なる「コミュニケーション・モード」を用いて伝達し、そして④如何なる形で相手からのフィードバックを受け取り、⑤如何にそれを反映させるのか、という点を真剣に考えなくては、折角の「日本は



アジアに対して先導的役割を果たす」という善意・責任感から湧き出た日本の意図も、相手からは有り難いと評価されず、逆に反発を招きかねません。換言しますとこれは国際社会における日本のリーダーシップを如何に考えるかという問題に突き当たると思います。

リーダーシップに関し、2ヵ月前の10月末、ジョセフ・ナイ本校教授が発表した論文“Soft Power, Hard Power and Leadership”を巡り、久しぶりに二人で静かにお話をする機会に恵まれました。同教授提唱の“soft power”に関しては、小誌を通じ、頻繁に紹介しておりますので、ご関心の有る方はそれを読んで下さい。ナイ教授は、スタンフォード大学のロドリック・クレイマー教授からの批判、すなわち、『ハーバード・ビジネス・レビュー(HBR)』昨年2月号に掲載された論文の中で指摘した“soft power”に関する批判を真摯に受け止め、上記論文を書かれました。クレイマー教授はリーダーシップを、“soft power”か“hard power”といった極端に単純な二元論で議論する危険性について指摘されましたが、それに応える形で、“soft/hard power”概念の洗練をナイ教授はされています。22ページの論文の中から、日本がアジアで発揮すべきリーダーシップを考えるために重要と私が判断した点をまとめますと次のようになります。

- ①リーダーは、(a)環境と目的、(b)リーダーシップのスタイル、(c)フォロワー達の資質によってリーダーシップの影響力が大きく変化することを理解すべきである。
- ②従って、この3つの条件を勘案しつつ、リーダーは(a)“soft power”、(b)“hard power”、(c)“smart power”を認識する必要がある。
- ③“soft power”は、相手やフォロワーを魅了することによって自らの意思を相手に容認させる「力」であり、その「力の源泉」は、(i)政治的ヴィジョンを描ける能力、(ii)コミュニケーション能力、(iii)カリスマ性を生み出す能力と自己の感情をコントロールする能力の3つである。

- ④“hard power”は、相手やフォロワーに自らの意思を強制的に容認させる「力」であり、その「力の源泉」は、(i)資源の配分や成果分配を効率に実現する組織を編成・管理する能力、また外部組織との戦略的な提携関係構築能力、(ii)相手やフォロワーと硬軟取り混ぜ交渉する能力の2つである。
- ⑤“smart power”は、3つの“power”の中で最も重要かつ概念上一段高い「力の源泉」であり、それは、(i)的確に環境を判断する能力、(ii)「運」に頼るのではなく、むしろ「運」を呼び寄せる能力、(iii)特定の環境下で、“soft”、“hard”を巧みに混ぜ、また使い分けられる能力の3つから構成されている。

これを、日本の果たすべきリーダーシップになぞらえつつ再整理しますと、日本は、①的確に国際環境を把握してパートナーやフォロワーである米国や近隣諸国に対して「如何なる日本のリーダーシップが有効か」を正確に認識し、同時に如何なる「手段」を使って自らの指導力を行使するかを判断し(“smart power”)、②明確なヴィジョンを描き、双方向の円滑なコミュニケーションをパートナーやフォロワーと行い、感情的な議論を極力抑えて合理的・戦略的対応を行い(“soft power”)、③国内制度改革と個々の組織改革を果敢に行うと共に、同盟国米国をはじめ中韓等の近隣諸国や他の先進国と積極的な協力体制を形作り、柔軟な姿勢で対応する(“hard power”)ことが重要となる訳です。余談ですが、ナイ教授の上記論文の冒頭にある『老子』の引用に触れ、私は、「先生、冒頭に、『老子』「淳風第17章」(太上は下之有るを知る。其の次は親しみて之を誉む…(その意味は、最も望ましいリーダーは、フォロワーにリーダーの存在感だけを抱かせる人であり、次に望ましいのは、リーダー自身に対してフォロワーが親近感・敬意を抱く人である…))を引用されていることに私は大変興味深く感じます」と申し上げました。同時に、同論文に係る『老子』の部分、例えば、第18章や第61章の話をする教授は目を輝かせながら喜んで下さいませ

した。ナイ教授のような立派な方は、東西の文献を広く、また深く読まれているものだと感心すると共に、お正月明けにまたお目にかかることを私は楽しみにしております。

さて、高い「志」と才能が溢れる若人の皆様、日本のリーダーシップは、皆様の将来のご努力無しでは決して世界から評価を受けることはありません。この意味で皆様のご活躍に期待し、同時に私も皆様が「知的武者修行」をしている間、「つなぎ役」として微力ながら努力してゆくつもりでいます。冒頭でご紹介した専門誌(JWE)の創刊を軽快なタッチで紹介した『エコノミスト』誌の表紙はキム・ジョンイル氏の大きな写真で“Who can stop him now?”でした。折角、仏国立農業研究所(INRA)の専門家によるボルドーやブルゴーニュのワインに関するブラインド・テイスティング結果について読もうとこの雑誌を手にした途端、厳しい現実を引き戻された重苦しい気持ちになりました。確かにアジア・太平洋地域は、核化と動乱直前の危機に瀕した朝鮮半島、不透明性の中の台湾海峡、悪化する自然環境の中で高成長を続ける中国、そして世界中を包み込んでいるテロとの戦いといった難問を抱えています。私達は刻々と事態が変化するこうした難しい問題を正確に把握し、日本の立場を明確にし、国際的協力体制を構築して対応していかななくてはなりません。しかし、事態は重大ではありますが、若人の皆様、決して悲観しないで下さい。早稲田大学の木下俊彦教授は、『日本経団連タイムス』(昨年8月10日号)に掲載された『21世紀のアジアと日本』: 共生は困難だが前進しかない』の中で、日本企業が、「異文化経営を前提としながら、人材確保とネットワークづくりに努めるべき」と示唆的なメッセージを述べられています。木下先生に代表されるような、「アジアの中の日本」という難しい課題を、双方向の知的対話と具体的な行動を伴った形で尽力されている日本の先輩方は少なくありません。こうした先輩諸氏のご努力を直接見ているからこそ、「悲観的なほど慎重に準備し、楽観的に

行動する人間(cautious optimist)」を自認する私も肩肘張らずに自らの責任を自覚すると共に、「志」の高い若い皆様に期待しております。

一時も視線を逸らすことのできない朝鮮半島情勢に関しては、日本が誇るジャーナリストである船橋洋一氏による『ザ・ペニンシュラ・クエスチョン』を、11月に一時帰国した際、ジェトロ(日本貿易振興機構)の塚本弘副理事長から薦めて頂きました。私は早速読み、公表されているだけでも日米中韓露に加え北朝鮮を含む8カ国の多数の政府高官からなる広範な情報ソースと、一方的判断を避けるために対立的な見解も取り込み、しかも独自の視点を貫く著者の姿勢と軽快な描写に感銘を受けた次第です。同書が近々英訳されると聞き、洞察力と説得力の持つこの日本発の見解が世界に発信されることを私自身大変喜んでいました。小誌昨年9月号で触れた「北東アジアの balancer(동북아 균형자/Balancer in Northeast Asia)」論について、著者は「韓国の安全保障のジレンマに対する確かな回答を与えるより、それに対する多くの疑問を投げかけることになった」とし、「韓国が置かれた新たな地政学的重圧感から逃れようとした心理的投影ではあっても、それに対抗する戦略的概念としては根付かなかった。そもそもはじめから、地政学的なリアリズムが欠如していた」と厳しい判断をしています。また一昨年、6カ国協議が9月19日に共同宣言を採択して閉会した直後、当時は韓国外交通商相であったバン・ギムン(潘基文/반기문)国連事務局長が、9月21日に母校である本校を訪れたことを *The Cambridge Gazette* の2005年11月号で触れました。著者は共同宣言の軽水炉(Light Water Reactor (LWR)/軽水炉/軽水爐/경수로)に関する記述で、英文では合意事項に従って明確な意図から単数・複数の峻別と不定冠詞・定冠詞の峻別がなされているのに対し、言語上の違いから日中韓の言語ではそれが明確に読み取れないという言語の特徴による微妙な差が生まれることについて指摘し、私自身深く頷いた次第です。このほかにも①



李白や陸遊の漢詩を引用して複雑な外交情勢の持つ意味を表現する教養溢れる中国外交官、②米国の諜報活動における様々なバイアス、③言葉の持つ意味と受け取り方が、各国・各人によって微妙に違うこと、④「桂=タフト協定」が朝鮮民族にとって今尚拭いきれない民族的トラウマとなっていること等が紹介されており、700 ページを超す記述もアツと言う間に読んでしまう魅力ある本です。「志」と才能に溢れ、またジャーナリズムや国際関係論にご関心の方は、世界に向けて発信できる船橋氏から多くを学んで頂きたいと思えます。

21 世紀初頭におけるアジアの中の日本に私自身が望むことは、船橋氏のような双方向で知的対話ができる方を日本が数多く輩出して、アジアに、そして世界に対して知的影響力を与えるだけの国際感覚溢れる日本の知識階層、換言すればクリティカル・マスに達した一群の「知的サムライ集団」が形成されることでもあります。その「知的サムライ集団」のなかでは、たとえ日本人同士だからといって意見が対立しているとしても「志」が高いが故に互いに尊敬している限り問題はありません。むしろ複数の見解を世界に対して日本から発信し、「一面的・単眼的」ではなく、「多面的・複眼的」な日本の考え方を、アジアを含む世界に理解して頂くことです。すなわち、日本の見解を立体的な形で評価してもらうことが、日本のリーダーシップにとって最も重要と考えております。前述の木下先生は、「日本経済は回復したが、アジア地域でのプレゼンスは低い。アジアの人々は経済回復を歓迎してはいるが、その原動力となったハイブリッド型の日本の経営モデルは理解されていない」と述べられています。私自身も、ハーバード大学での日本の「知的プレゼンス」の希薄さを毎日肌で感じています。かといって、私がここで興奮気味に、また空しく独り善がりな形で「日本は凄いいんだぞ!」と叫んでみても無意味なことは明白です。今は、時の到来を信じ、また同志の数の増加を信じて、微力ながら努力を毎日続けるしかありません。

#### 4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」の新年号の本文は以上です。年の初めに当たり、「志」が高く、また才能溢れる未来の「知的サムライ集団」と、美酒がなみなみと注がれたギヤマン・グラスや金杯を高く掲げて、明るい将来を語りたい気持ちで一杯です。さて、約 15 年前、世界の中で眩しい程日本が輝いていた頃、そしてアジアの人々が日本に期待し、また日本人自身も将来を疑わなかった頃、或る感性豊かな日本のミュージシャンが『TIME CAN'T WAIT』を著しました。そして次のように語ります。「僕は日本人として生まれてきたのだから、日本が誇り高い毅然とした国であってほしいと切に思う。… TV のドキュメントを見て『感動』してしまう時くらいで、その余韻が残るのも二時間ほど。日本の不幸はそこから始まっている。世界がほんとうに日本に対して言いたいことは貿易不均衡のことではない。日本の倫理感の無さを問うているのだ。ある親が他人の子供の様子を見てその親に『躰の悪い子供ですね』とはとても言えないから遠回しに『まあ元気なこと』とか言って眉をひそめていると同じように、『日本も先進国になったのだから』と出来る限りの厭味で意志を伝えようとしているのに『我が国もとうとう先進国の仲間入り』と喜んでい。…時は決して僕を待ってはくれない。またいちにちが終ってゆく。理想を後回しにせず、一所懸命生きてゆきたいと思う」と。私はお屠蘇気分のなか、この小田和正氏の本を再読しつつ、「若い皆様に応援するために私に残された時間は幾ばくだろうか」と考えております。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com